9年間を見通した一貫した指導で生活を安定させ、学習意欲を高める

秋田県 湯沢市立湯沢東小学校

2011年に3校が統合して新たなスタートを切った湯沢市立湯沢東小学校。統合した当初は、新しい人間関係の中で子どもたちが自分を出せない姿が見られた。小・中学校が合同で授業改善に取り組む一方で、自学を促す家庭学習の指導などに力を入れ、意欲的に学ぶ子どもを育んでいる。

取り組みのねらい

- 3校が統合して3年目であることに配慮し、子どもが同じ方向を向き、安心して学べる環境をつくる
- 主体的に学ぶ意欲や挑戦する気持ちを育てる

取り組みの内容

- 小中一体型校舎であることを活用し、小中の教師が協議し、9年間を見通した「生活習慣」「学習習慣」「家庭学習の手引き」といった規律を作成
- 小中合同で「学びのスタンダード」を設け、授業改善を目的とした研究に取り組む
- 「自学ノート」を中心とした家庭学習の指導を行う

取り組みの成果

- 子どもたちが落ち着いて授業に臨むようになった
- 家庭学習に積極的に取り組むようになった
- 中1ギャップがほとんど見られなくなった

School Data

◎2011（平成23）年、湯沢東小学校、湯沢北小学校、岩崎小学校が統合し開校。小中一体型校舎という特色を生かし、授業や行事、避難訓練など、さまざまな教育活動を連携して行っている。

校長	姉崎克則先生
児童数	514人
学級数	20学級（うち特別支援学級4）
所在地	〒012-0803 秋田県湯沢市杉沢新所字八斗場33
TEL	0183-72-5125
URL	http://www.yutopia.or.jp/~higa-es/
公開研究会	未定

◉取り組みのねらい

学校の統合を機に小中連携で教育活動の充実を図る

湯沢市立湯沢東小学校は、2011年、湯沢東小学校、湯沢北小学校、岩崎小学校の3校が統合して開校した。開校に当たって湯沢市立湯沢北中学校との一体型校舎を建設し、小中連携もスタートさせた。姉崎克則校長は学校づくりの方針を次のように語る。

「全ての子どもが安全に過ごし、安心して学べる居場所があること、そしてしっかりした学力の保障を原則として、保護者や地域から信頼される学校を目指しています」

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

学校周辺には田畑が広がり、穏やかな風景が続いている。3世代が一緒に暮らす家庭が多く、子どもたちは大勢の大人に温かく見守られながら成長している。

「湯沢市のある県南地域の人々は穏やかな気質だといわれますが、子どもも素直で純朴です。生活習慣は整っており、先生方は学習指導に集中できています」（姉崎校長）

学習面の課題は、言われたことには熱心に取り組むが、他の子どもの発言を待ってから自分の考えを出すなど、やや消極的だったことが挙げられる。

◉取り組みの内容

9年間を通した学習規律が学習姿勢の安定感を生む

3校から集まった子どもたちが同じように学べる環境をつくるために、最も重視したのが学習や生活に関する規律の共有だ。湯沢市が小中連携に力を入れていることや、小中一体型校舎となったことから、規律は湯沢北中学校と協議して9年間を見通して作成した。

学びのベースとなる「東っ子の学習ルール」は、湯沢北中学校での学習の規律を、小学生の発達段階に合わせてアレンジしたものだ。「身の回りを整理整頓しよう」「タイム着席をしよう」「語尾まで話そう」「ていねいに字をかこう」など7カ条から成る。

この他、あいさつや礼儀、テレビやインターネットなどへの接し方など、生活習慣の指針、授業の準備や受け方の基本ルール、また家庭学習の手引きも作成した。これらは、小学1年生から中学3年生まで、学年を追ってステップアップしていく形式とし、一貫した指導が出来るようにしている。

このようにして学習や生活に関する規律を明確に打ち出したことで、学校運営に統一感が生まれているという。

「教職員全員で指導方針を共有し、指導の足並みをそろえているため、子どもは進級して担任が変わっても戸惑わずに学習に取り組んでいます。こうしたルールが基盤となり、積極的な学びの姿勢につながっていると考えています」（姉崎校長）

写真　6年生の国語の授業では、新聞記事を読み、見出しをグループで考えた。全ての学年や教科で学び合いを重視しているため、子どもたちは話し合いに慣れており、積極的な姿勢で議論が出来ていた

湯沢市立湯沢東小学校校長
姉崎克則 あねざき・かつのり
「先生方一人ひとりの力を最大限に引き出し、そして全員の力を結集し、学校教育の力にしたい」

湯沢市立湯沢東小学校
中川玲子 なががわ・れいこ
教務主任。「『ピンチはチャンス』と考えて学校を変えていきたい」

湯沢市立湯沢北中学校校長
半田 忠 はんだ・ただし
「夢と希望に向かって、『チャレンジ、チャンス、チェンジ、チームワーク』の4つの『チ』を大事にしたい」

湯沢市立湯沢北中学校
丹 俊章 たん・としあき
研究主任。「チームワークを大切に、小中の教師間はもちろん、子どもや保護者とのつながりも大切にしたい」

共通の授業フォーマットで小中の授業の展開を統一

子どもが積極的に意見を言えないことが課題として挙げられていたが、特に開校当初は、互いへの遠慮などから、なかなか自分を出せない姿が目立った。そのため、主体的に学ぶ意欲や挑戦する気持ちを育成する必要があると考え、12年度から小中合同で、「『考える力』を育てる指導の在り方～『比べる・つなげる・書く』をキーワードとした授業改善～」をテーマに研究に取り組んでいる。

研究は、小中合同の教科部会を中心に、小中共通のキーワードを設けて授業づくりについての議論をしながら進めている。12年度は、自分の考えをしっかり持てる場を設定することで、自信を持って伝えられ、更に友だちの考えと「比べる」ことなどによって自分の考えを深めていくという観点で研究を行った。13年度のキーワードは「つなげる」だ。話し合い活動に加え、「既習の内容と授業で得た知識をつなげる」「友だちと考えをつなげる」「体験と知識をつなげる」などの指導を重視している。そして、14年度は「書く」をキーワードにして、書くことを通して考えを深める学習を研究する予定だ。湯沢北中学校研究主任の丹俊章先生は、「小中の教師が視点を共有することで、学校種を超えて有効な議論が出来ています」と説明する。

研究の成果の1つが、問題解決の過程を明示した「学びのスタンダード」(図)だ。小学1年生から中学3年生まで共通フォーマットを用いて授業を構成していることがポイントだ。

「学年や教科によって応用しますが、『これだけは！ 実践事項』という3つのポイントは、全ての授業に盛り込むように努力しています。授業展開を統一することで、子どもが見通しを持って学ぶ姿が見られるようになりました」(姉崎校長)

子どもたちは次第に考えを共同で深められるようになっている。6年生の国語の授業で行われた、新聞記事を読んで見出しを考える活動では、グループごとに最も大切な段落は何かを話し合ってから見出しを検討した。どの子どもも話し合いに積極的に参加し、相手の意見をしっかり聞いた上で自分の考えを述べ、考えを深めていく姿が見られた。その後のグループ代表の発表でも、皆が発表者を見つめてうなずきながら耳を傾けるなど、聞く姿勢がしっかり出来ていた。

繰り返し評価されることで学ぶことの楽しさに気付く

同校で塾に通う子どもはほとんどおらず、学校外学習は家庭での宿題と自主学習が中心だ。家庭学習も小中接続を意識して指導する。

家庭学習の基本方針は、宿題は毎日必ず出

図　「学びのスタンダード」(抜粋)

過程		学習活動と児童生徒の姿	指導のポイント
導入	❶ つかむ	◎課題の意識化 ➡学習課題・学習のめあて(本時のゴール)をつかむ(何が、どのくらいできるようになればよいのかが分かる) ➡既習事項と「どこが」「どのように」違うのか気付く	●前時の想起 ●既習事項との比較 ●動機付け・意欲付け ●学習課題・学習のめあての明示 ●「先生の課題」から「児童生徒の課題」へ
展開	個の力を高める ❷ 読む 見通す	◎課題解決に必要な情報の取り出し ➡文章・グラフ・データ・図表・記号・心情等の多様な情報を読み取る ➡予測する。解決の方法、見通しをもつ(「何を」「どう」考えていくのかが分かる)	●資料モデルの提示 ●資料の読解を学ぶ ●情報の共有・比較
	❸ 考える	◎一人でじっくり考える場の設定 ➡一人で考え、自分の考えをもつ(自分の考えを書く等) ➡既習事項を生かして考えていこうとする。(考えの根拠をもつ)	●考える視点の明示 ●考える時間の設定 ●考えをもたせる手立ての工夫 ●ペア・小グループでの活動 ●ヒントコーナー等 ●既習事項を振り返る環境整備
	共同で深める ❹ 深める	◎考えを「伝え」「くらべ」「深める」 ➡自分の考えと比べながら友だちの考えを聞く。質問する(「どこが」「どのように」同じか違うか) ➡友だちの意見と比べながら、自分の意見を伝える ➡友だちの考えのよさに気付く ➡自分の考えを見直し、修正する	●話し合いの視点の明確化 ●話し合いの視点に沿う発言 ●発言は「頭括型」 ●考えの類型化 ●意見を吟味する視点の焦点化
終末	❺ まとめる 生かす	◎学習の振り返りと変容の自覚 ➡学習課題・学習のめあてに沿って、自分の言葉で振り返る ➡自分の達成度・理解度を判断する ➡学んだことを生かしたり、もっと学習したいことや新たな疑問を見つけたりする	●振り返り ●キーワードの提示 ●応用問題等の実施 ●次時への意欲付け
家庭学習		◎授業で学んだことを生かして次の時間までにするべきことの確認(復習の場合も、予習の場合もある)	

小・中共通 これだけは! 実践事項

Point❶ 学習課題・学習のめあての明示
- 赤のチョークで、課題・めあてを囲むか、アンダーラインを引いて示す

Point❷ つなぐ=交流
- 自分の考えと友だちの考えをつなぐ(個々の思いを交流する)
- 友だちと一緒に体験する
- 既習事項を生かす、結びつける
- 友だちの考えのよさに気付く
- 自分の考えを加除修正する　など

Point❸ まとめる　生かす
- 青のチョークで、まとめの部分を囲むか、アンダーラインを引いて示す
- 「学習課題・学習のめあて」に沿って、自分の言葉で振り返る
- 1時間の学びを振り返ることのできるノートを工夫する

湯沢東小学校と湯沢北中学校は、「小・中連携通信」を定期的に発行し、小中連携の研究成果を両校全体に発信している。上記の「学びのスタンダード」もこの通信で発信し、各教師が実践している

＊同校の資料から抜粋して編集部で作成

主体的に学ぶ力を育む――学び方の工夫で学習意欲を高める

し、2年生以上には「自学ノート」の提出も課す。学習時間の目安は、両方を合わせて「学年×10分」だ。自学ノートは、子どもが自由にテーマを決めて学習する。ただし、2年生は導入期間として担任がテーマを出し、具体的な内容は各自が考えて取り組む。そして、3年生以降は、教科も内容も自分で考えて取り組む。学習内容は、子どもによって大きく異なると、教務主任の中川玲子先生は言う。

「学習に苦手意識がある子どもは、漢字や計算などの反復練習にまず取り組むことが多いです。子どもの様子やノートの内容を見取り、学習を発展させた方がよいと思ったら、『その漢字を使う文章を書いてみたら』など声を掛けています」

更に、6年生には中学校での学習を意識させるため、湯沢北中学校が定期考査の時にはその前の1～2週間がテスト期間になると伝えたところ、その期間に自学ノートを頑張る子どもが増えた。また、テスト後に間違えた箇所を見直して復習するように促している。

自学ノートは、子どもと教師の連絡帳の意味合いもある。担任は毎日一人ひとりの自学ノートにコメントを書き、学習内容を褒めたり、励ましたりし、時には、学校生活で気になったことをフォローしている。

「良いところを評価する指導を続けるうちに、子どもは学ぶこと自体を楽しんでいる様子がうかがえます。クラス全員分のコメントを書くのは時間が掛かり、負担に感じることもありますが、子どもの成長が見られるのは、それ以上の喜びがあります」（中川先生）

更に、小中連携の一環として、6年生には予習をするように指導している。

「中学校での学習にスムーズに移行できるように、次の授業の教科書を読むように指導するなど、徐々に予習の方法を教えています。予習をすると授業が分かりやすいという体験を積むと、子どもは自然と予習の必要性を感じるようです」（中川先生）

湯沢北中学校では、いわゆる中1ギャップに悩む生徒がほとんど見られないという。これは、学習や生活の面で9年間を通した指導をしていることの結果と、両校は捉えている。

◉取り組みの成果

成人式を迎える時に「自立」できるよう長い目で捉える

今後も、小中連携による教育活動を充実させ、先を見通して目標を持って学ぶ子どもを育てたいと考えている。すぐには「成果」を求めず、子どもの成長を長い目で見た指導を続ける考えだ。湯沢北中学校の半田忠校長は展望をこう述べる。

「自立して自分の足で歩める『大人』になって、初めて私たちの教育の成果が表れたと言えると思います。子どもたちが成人式を迎える日が今から楽しみです」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教職員に学校づくりの方向性を明確に示すことを何より大切にしています。研究や研修の内容について細かく指示するのではなく、「こういう子どもを育てよう」といった理念を話し、働き掛けています。

学校を高めていくためには、教職員が同じ気持ちで同じ方向に進む必要があります。例えば、本校の教職員を「チームイースト（東校）」と呼んで仲間意識を高め、チームワークを強くするように努めています。

校長　**姉崎克則**先生

ミドルリーダーの役割

校長先生が示した方向性を具現化するために、どのように進めていくか、具体的なステップを考えることが私の役割です。「それは難しい」という声が上がったとしても、すぐに諦めず、どうすれば可能になるかを模索するように心掛けています。

1人で考えるには限界がありますが、先生方と話し合う中で良案も生まれてきます。小中の区別なく、チームの力を生かして進めていくように心掛けています。

教務主任　**中川玲子**先生